

郎路生麻·幹主

川柳新誌



正十三年三月二日發行
大正十五年九月一日發行
（前卷一冊）

川柳雜誌社發行

◆柳 珍堂 忌

日時 九月三日午後七時より
場所 大阪市南区清水町
停留場西入

端の坊

◆兼題 「無口」三句

◆實費 參拾錢

初心者の來會を歓迎す

◆柳 翁 忌

日時 九月廿三日午後七時
場所 大阪市南区日本橋一丁目
交又點北の辻東入南側

日本橋俱樂部

電話南三四二四番

◆兼題 「白足袋」三句

◆實費 參拾錢

初心者の來會を歓迎す

◆遅日莊柳談會

日時 九月十二日後夕刻より

場所 阪神沿線鳴尾 麻生路郡方

◆批評吟 難吟持參のこゝ

◆會費 不要

川柳雜誌 第三卷第九號目次

蠅の外にて

麻生路 郎(三)

古句 雜考

竹馬居主人(五)

近作

麻生路 郎(一)

川柳漫評

木村半文 錢(六)

樟の葉かけ

安川久流 美(四)

川柳涼み船

塚崎松郎 記(八)

殘暑二題(漫書)

森田ひさし(四)

文藝交友思出物語(續)

吉田きよし(二)

青明 忌

橋本二柳子 記(三)

川柳家戸籍調(三)

萬よし 生(二)

粒々集

安川久流 美(三)

近作柳樽

麻生路 郎 選(三)

句集募

安川久流 美 選(六)

榮水 轉

柳川洲馬 選(五)

各地柳壇

二柳子・柳路共選(三)

川柳塔

松郎 編(三)

遠近 紙 繪
松郎 柳路 助六 飯山 鐘翠 万よし 駒入 葵豆 馬行 二柳子
(三) 編輯後記 路 小出 楢重
生(三)



近作

麻生路郎

見渡すミユダのころをみんな持ち
親ごいふ馬鹿になりきるまでの僕
誘ふても呉れぬほぎ髭のびてゐる
ほれたよな惚れられたよな顔で物干
子のこさを女の方に云ひ出され
遙にみれば夫婦のやうに見ねもせう
心太をさみしがるほぎ女ふけ



蜬の外にて

— 半文錢氏の一讀をのぞむ —

麻 生 路 郎

一 所謂革新に就て

前號で半文錢氏が革新派の上に所謂をつけられることをヒドク氣にしてゐるが、私も所謂をつけた覺があるもので、その理由を少しく説明しておこう。これは、私の用ひた所謂の説明であつて他人達が用ひてゐる所謂の説明ではないから、それと混同しないやうに願ひたい。日本語はさうも不便で同じ文字でも使用者に依つて意味が違つてゐるのであるから厄介である。

私の用ひた所謂は最近二三年間に革新派たることを自稱してゐるグループをさして呼んでゐるのである。だから勿論半文錢氏もその所謂革新派の一人と見てゐるのである。さうした扱ひ方を不當とされるならば取消してもいいが、僕は便宜上それを使つてゐるのである。さ、いふのは『舊い川柳では、もう駄目だ』と悟つたら、ソレが革新なんだ。句の傾向を意味せず、心の革新だ、心が革新すれば革新派ぢやないか』と君が云つてゐるやうに心の革新は、自稱革新派の人達ばかりが革新してゐるのではないからである。だから所謂革新派の名を與へて夫れ等の人々を區別する必要がある。おこつて來るのだ。同じく革新と稱してゐても、主義主張を異にしてゐる場合には、同じ革新の名によつて一括して論ずることは論者として探るべき道でないと思つたからである。私は所謂革新派といへども、これを三に分類して見てゐるのである。中には何處が革新なのか一寸見當がつかねる所謂革新派もある。所謂革新派から所謂革新では駄目だ』と悟つて逆轉的に革新した觀が無いでもないものもある。斯ういふのは逆轉革新派でも云つて所謂革新派と區別しなければなるまい。中には模倣革新派と呼んだ方が適當ではないかと思ふ所謂革新派もある。君のいふ『舊い川柳では、もう駄目だ』と悟つたらソレが革新であり、心が革新すれば、革新派ではないか』といふ論旨で行けば僕なんかは實に古い革新派でなければならぬ筈である。舊い川柳では、もう駄目だ』と悟つたのは明治の末葉であるからである。その後、私等の句

は新傾向の名をもつて呼ばれたが、私等は自ら稱して新傾向派とは云はなかつた。たゞ私等三傾向を異にした人達が勝手にさう呼んでゐたに過ぎなかつたのである。革新といふ言葉も文壇から輸入した言葉であるが、使ひ方が非常に拙であると思ふ。僕は革新派と聞くに、政治團體や十三等俳優の一團なきを思はされていやだ。だからある一部の自稱革新派の人々をよぶために所謂をつけたまでである。むしろ、短歌のアラ、ギ派のやうに氷原派とか大正川柳派とか呼ぶ方が適切さがありはしないかと思ふ。所謂をつけた私の理由は以上の如しである。

二 漸進主義の假裝と急進

これも、前號の所謂づき革新派を氣にした記事の續きに「川柳のためにでなしに、自己のために川柳があるのだ、だから主張を貫くためには急進する。むしろ漸進主義を假裝するよりは、さうしてゆく處まで行つて仆れる―それ等の方が何んなに藝術的であらう。私は、こゝろで氣づきながら、感情の上で革新派たる事を選ける人々を卑怯だと思ふ」を書いてゐられるが、これも立場の相違といふことを考へれば何でもない話である。自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには急進するといふ事、自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには漸進するといふ事は、主張として同じでなければならぬ。だから、その一方が一方を非難することは出来ない。ゆく所まで行つて仆れる方が藝術的だといふが、それでは主張を貫くといふことはお留守になつてゐないか。主張を貫くためには途中で死んでも死にきれぬといふことが、どんなに人間的で、しかも悲壯で藝術的ではなからうか。藝術的といふ言葉は妙なところへ使つてしまつたが、花火線香のやうに闘つて死ぬだけが藝術的ではないと思ふことを云ひたいのである。要は立場の相違である。殊に君の説く感情の上で革新派たることを選ける人々を卑怯だといふやうな言葉も己を強いることの甚だしいもので一種の愚痴だしかうけきれぬ。もう少し堂々として作句を評論で押してゆき、あゝは知らぬ顔でゐるのがよからうと思ふ。子供だつて強いられることはいやだから。

三 放哉に對する涙

半文錢氏は又「俳人放哉の安心を知つてヒドク心にうたれた。彼の井泉水氏に宛た手紙をみて、なぜか私は涙が落ちた。」『あの死を速める覺悟は決して逃避ではない』と讚美してゐられるが、僕は放哉の手紙を読んでも涙も落ちなければ彼の死を讚美する氣にもなれない。彼の死は一種の贅澤である。彼の弱さから出立してゐる。僕はあゝした方面の人に少しの同情もない。一茶の立場なきは全然違つてゐる。句に於てもあの生ぬるさでは重哉はおろか一茶の足元へもよりつけない。僕はむしろ、半文錢氏自身の「私も、なるべく悲愴な死に方をして社會制度の缺陷に酬ひたひと思ふてゐるが、さうも死ねぬ。なかなか死ねぬ」の數語にこそ同情の涙を禁じ得ないものである。

漫畫 殘暑二題

森田 ひさし

◆ 美人



そんなにか美しく感じられる。街の女の後姿にもその様に美しい。そんなことを考へてゐる間がやつぱり若くて美しいのかも知れない。

萬緑紅一點の言葉の様に畑で働いてゐる女は美しい様に思へる事はない。そ

してそれが
そばで見
るすぐ幻滅
を感じる程
でも遠くか
らそれを見
る時それが

樟の葉かげ

植物にめぐまれる

久流美

生存競争に追ひつめられた揚句が、この五六年に、狭つ苦しい所ばかりになつた私は、よほぎ植物にはなれることの出来ない縁故があるものゝやうである。

現在の所へ引越さない前は、金澤で一番川幅の廣い犀川を前にしてゐたが、川ぶちである家の前には數本の柳と楓の一本が春の芽ぐみを氣持ちよく見せてくれた。よほぎ古くは主計町のやうに紅い軒燈の並んだ町だけあつて新橋の袂から柳の植てあつたのもうなづかしむるのであつた。

七月の末を俄に引越したが、夏らしい名の玉川町通りで、私の落ちついた家は、往來から二間餘は奥へ引つ込まれて

◆ おもひやり

女が結たての髪に一寸さわろうものなら、その時こそ女のあらゆる表情が一度にその筋肉をゆるがすが、そんな事は女だけかと思つてゐたら、やつぱり男にもあるこゝを發見した。白靴のモダンボーイがそれだ。びんの一筋にも軽い心痛を

おほへる様

に白靴の先

に一寸の下

駄のかゝる

のも心痛に

なる。足を

引き、もう



手にその防備をするもお手前静止は乗物そのものゝ動きに、そばつゑを喰つて大きなお尻を額にぶつつけられて、おまけに防備線も突發されて白靴は無惨にふまれる。そこへ来るゝ登山のお人はひやゝかにそれを見てゐる。頭を氣にする女も自分の頭はさには思はない。思ひやりも頭足みではやつぱり違つて行くらしい。

る。門はないが、ミに角家の前五坪ばかりの空地には一本の若葉茂る樹があつた。それは、こんな櫛比した街には珍らしい樟の樹である。歌人白秋さんの好きな樹である――。

五坪の空地に何も皆無だつたからつてそれ迄のこゝだが、この一本の樟がされだけ、私等にめぐみ多いものか知れない夏の強い日の葉かけ、西にさめゝ濡れた青葉のいろ眼にも心にも、そして六尺の體軀にも、自然の恵みは與へられるのである。

川べりの葉柳はよく風に散つた。だから朝夕は掃く。しかし、樟の青葉はめつたに散らない。そよ風に夏らしい戦きを見せてゐる。

◆ 樟の葉の蔭遊ぶ子を慈しめ

◆ 樟の葉を見る眼柳が忘れられ

(八月一日)



川柳漫評

木村 半文 錢

六

最近の番傘に、綠天君が久しぶりに句を出してゐた。讀んでみるにさすがにリズムは整つてゐる。うまい作家だな——直ぐうなづかれた。それにしても、長い間作らない同君の作品が他の諸君より優れてゐるのは、すこし皮肉に見られるではないか。あの中で『手紙』『大鐘』『抽斗』などはよい、だが赤ん坊本來空を握りしめ

は、出色の作品だが、『赤ん坊』の置き方は一考の餘地があらうと思ふ。それに『本來空』に對するに餘りに輕きに失するやうではないか。言つてなまじいに『おさな子』だの『乳のみ子』のなまじ、つけたくない。むしろ『いさけなさ』は少し生きやうが、それでも上五にびつたりと据はらぬやうだ。嘗て私は

襖襦の中に水火を握りしや

ミ、例の爭鬭辭を出したことがあるが、『本來空』の心境を捉へることがどうも出来なかつた。今も、無我さうな境地を專念に發掘してゐるが、社會や環境を見返るミ、すぐ自我が首をもたけてだらしない。日車君の

やがて手の筋が夜明の眼に泛ぶも、悟りきれぬ紙一重のミころだと思ふ。話しがへんに歪みかけた。それで綠天君の作品で難點をあげるミころは、御講中色氣をぬきに若返り

この句は『色氣をぬくミ』にもこれ、まさしく『ぬき』を生かしてゐない。『ぬき』のよみ方で誤られ易い。それに内容もズツミ下等品だ。だが『御講中』などは、いまぎきの作家ではようこりいれない。大抵は『講内』はミか『講中』はミ説明の順路に入るやうだ。番傘の句なみにさういふ傾向が多い。上五

に『何々』は「だの『何々』を」だの置くこゝは、餘程考へないこゝに出て來る内容をまづ冒頭でぶちこわしてゐるやうなものだ。干竿の音はわが家かお隣か巧に、屈折したりズムだが、少し誇張がかぢはしないか？それから、番傘の人々は句が旨い——この定評があるが、旨い句もあれば、全くバカらしい句もある。それをいぢく批評してゐては、こちらの壽命がぢまる。で、眼立つたりズムの悪いもの、亦はほんの一字の不備の句なき二三氣づいたのを、あけてみよう。

(1) 救はれたやうに蚊帳から女出る 蝶 二
(2) 退院が近く他人の手術も見 不 二 綱 子
(3) 下女二人笑ひ笑ふて風呂が沸き 巨 頭 子
(4) 弟子按摩ひがんだ話して歸り 義 矢 蘭
(5) 信心に細く長く生きてゐる 紋 太
(6) 反抗の眼が重役の椅子へ行き 夢 春 三
(7) 商賈は天地にはぢず尻からけ 夢 路 三

は、既に「救はれたやうに」の比喩が利かない。古句の足許にもよれない。それに化物じやあるまいし「女出る」なきこは以ての外だ。(2)は「退院が近く」ミ緊張しながら「他人の手術も見」の間のびさ加減は何うだ。(3)は「笑ひ笑ふて」ミリズムをたゝみ込みながら「風呂が沸き」ミぢこはして了つた。このがは正に耳觸りだ。若しがを生かさうすれば「笑ひこころけて」ミ濁音を一つかける方が穩當だ。(4)は「ひがんだ」ミ「ひ」を

用ひながら、不用意にも其の下へ「話」のしがあり「いて歸り」の「し」があり、全く文字の使ひ方を知らぬものだ。(5)の句は全てが説明におちて、リズムにはり合ひがない。こみ入つて解説するミ「信心に」は「ん」を二つ重ねたらいよいよであるが「細く長く」は硬うなつて、しかも「ミ」の渡し方ミ、「生きてゐる」の尻すほみさに、ぜんたいのリズムの相うつ響がないやうだ。(6)は、「反抗の眼が」の強いものと、下五の「椅子へ行き」の浮腰ミが相反馳してゐる。「が」「ミ」「へ」の用ひ方の不明からだ。この場合は寧ろ「眼は」「ミ清音にした方がよい(7)は、俯仰天地に極ぢずをかりたのだが、「商賈は」の置き方は俗の骨頂だ。氣が利かないこゝ夥しい。それにしても、少し全體の句の内容にふれてみたいが本質的に批評するには、餘りに内容が空虚であるやうだ。それから水府君の「水道」の句なきは、さすがに巧者であるが

電柱は都へつゞく懐しさ
の、は強くへはくづれてゐる。「殊に」「さ」止の句として「内容」はもう一步のミころにあるが、氏ミしては此の想像が離せないであらう。

縮緬の袖に涙はよくにぢみ 水 府
にしても、下五は不熟である。よく滲むミころをみつけても、これでは困る。

珍らしく水府君が句評を書いてゐるが、おかげで松窓老ミ溪花坊君の近作にお眼にかかつた。おかしいのは溪君の句境だ。

ヤレ／＼長生きはしたくない。

見上ければ一階に椅子の端が見

路郎

椅子の端に思想的なびつとしたものがないから水府君説のやうに單なる寫生に終つてゐるのではないか。殊に『見上ければ』は自己の心理作用が置かれてある以上、もつと切實なるものが欲しかつた。それに、これは私一人の癖かもしれないが『見上ぐれば』とした方がよいやうに思ふ。序だが『のろけ』を姉も妹も』は同君の近來での愚作だと思ふ。

ところが路郎君の作品で、川柳雜誌にのつてゐるのには

このごろの疲れさんでりやは重し

となつてゐるが、水府君評の番傘では

このごろの疲れさんでりやは重し

『ろ』の一字を入れてある。そして水府君は、それを基礎として批評してゐるが、ア、でよいのか。尤も『ろ』の脱字のやうにも思ふが、『このごろ』をほんさうに使つてゐるのかもしれないではないか。

時の力もあをきかなし

路郎

『あをき』の感覺味に生かされた句。『青き』『悲しみ』『眞子』を用ひぬところに、作者の感覺的なうである。謂は、句を發表する上の用意である。其の他『誕生日』『すべりんこ』など同君の畑だと思ふ。序に川柳雜誌の川柳塔をのぞいてみる馬行君の作品はたつちやすぎる。ア、を越す『惡』がつく。

。(僕にも經驗がある)

親に敗けて今宵となりし金屏風

結婚の句としては、よく整つてゐるし、事の推移も分る。ないでもないやうだが、この『敗けて』の『敗』の一字がキズだむしろ『まけて』は假名にする方がかいい。併し全體の句はリズムがたつちやすぎるほかに活躍してゐる。一度ア、を出し切つてしまはねば自己のリズムの本来に還れぬ。

次に、莢豆君の作品は、いつも苦しんだあみが見える。俳趣のかつたものたまにはあるが、川柳塔中でも屈指の作家であらうと思ふ。それに飯山といふ人を、ちかごろ知りかけたが八月號の川柳塔よりは、例會さか小集吟の方に見るべきものがある。將來のある作家だと思ふ。松郎君にはさき／＼句があるが、さうもふざけの方が多いうだ。八月號では可なり活動してゐるが、みな『うで』に任せてまゐり立るやうだが川柳塔ではなくて叶はぬ作家の一人であることは勿論。塔中たゞ一人の女性、霞乃さんは、さすがに洗練されてゐる。『朝の蚊帳』『ひきがへる』『オブラの葉』の比喩など、その人らしい見方である。

鬼灯さ見しは東の間の金魚

ひさまづは大きく見せて金魚浮き

『鬼灯』に見立てたはさすがに女性。塔中での光つた句。次の『金魚浮き』は苦しい。『ひさまづは大きく見せて』は『あつぱれな表現だ。一寸眞似る人はあるまい。莢豆君の『はつた』いこ』『麥飯に』など共に、『東の間の金魚』を推賞して置

きたい。

頭がすこし、偏してゐるやうに思へるが、(僕の頭が偏してゐるのでもあるが) 情熱の人、刀三君の作品がないのは淋しい。尤も將來を嚮望するに足る人だが句がないのは淋しい。詩人は情熱的でありたい。情熱のない小柄巧ぶりは吾等は既に厭きてゐる。理智を壓倒さす情感をすばりツミ投けてほしい。皮肉も諷刺も何にもいらぬ。ほんごの情感を盛きつた句がみたい。刀三君が灼熱すれば出来やう。そこへ——何にか内容らしさの思想を混ぜる。却つて涼床に釘が出てゐるやうで可けない。いづれは、思索的に歩いた人ではあらうが、出せるだけの情熱は、出せるだけの時代に出して置かねば、それが欲しいと思つた時に既に枯渴してゐる。四十代——五十代——六十代になつてもまだ情熱のある人は、多く天才肌の人に認める。殊に、情緒のこまやかな境地にはいるのは、四十を過ぎてから爲されるころ——。刀三君が、今の情熱の皮肉や諷刺にのみかられることがなければ、良き情緒を今後に拓くだらうと思ふ。私は、それを待ちたい。若し皮肉や諷刺や穿ちが欲しいなれば、一日も早く思想を整理せなければならぬ。刀三君の自重を望むや切。こんな事を書いてゐるに、私自身が完全であるやうだが、それは悞しい。實に、自分の不完全さを知りぬいてゐるのだ。他人の句のキズは見易い。少くとも、川柳家といふタイプは、皮肉にものを見ることに優れてゐるやうだ。が、自分に向つて皮肉に見やうとする素質に缺けてゐないであらうか、私自身に省

みて悞しいさがある。それを見すごしてすつてよいのであらうか。一般の川柳家も、私と同じやうに、内に省みてゐるのであらうか、皮肉に、自己を投げ出してゐるのであらうか、何うだらうか。

こないだ、日車君が訪ねてくれた時に、久しぶりに川柳談をした。その時、近作を互に少々ばかり見せ合つた。實は、見せ合ふ云ふことは大分に久しい事である。日車君の作品は茲で發表しない。同君のアハ慎重さに對しても敬意を表しておく。

が、私の句は謂はゞ惱みの寸斷される境地にある。一寸切られるも、二寸切られるも、事は同じだ。いかも、私自身にも研究が不足であるから、すこし書いてみた。要は、『さういふ時は僕なれば斯うする』を教へてくれる人が欲しいのだ。由來、川柳家は自尊心が強い。これは詩にたゞさはるものゝ至てが共通してゐるさみてもよい。尤も、自尊心がなければ個の躍動もないわけだが、一般には自尊心がうぬほれに近いやうでもある私も、そのうぬほれを茲で張り替へてみよう。

進むまゝ時計の中の針の陰

日車君は、『時計の中の針の陰』でよいではないか、といふ御意見だつた。私も同感なんだ。『進むまゝ』は私一流の思索の経路であるが、それが餘りにハツキリ説明されてゐるのは缺點だ、この缺點をあけた日車君の眼は鋭い。だが同君もこれを何うすればよいか説明はしない。そこが日車一流の『黙』にあるのだらう。私は此の上五を變へるのに苦しんだ。が、た

うく「君見ずや」に附けて了つた。私としては、すこし厭や味に感じるのであるが、それ以上に今、適切な文字がない。

病み疲れ久しき渴を地に覺ゆ

この句も、日車君にまで語つた中の一つであるが、同君は「久しき渴を地に覺ゆ」に對して、「君は文字が多い」をもらしたそれは一面に私に文字が多すぎる缺點にも聞こへるが――。だが、私はこの句に就ては、その時、聊か誇り（うぬほれだらう）を感じてゐた。が、日車君が歸つてから三日して、すこし不安になりかけた。それは「病み疲れ」がいかにも平凡（へんぺい）（實感ではあるが）だと思へて仕方がないからである。それに此の上五は下の十二字のリズムの緊張味に打ちまけて、何んもなくそぐはないやうにも思へるからだ、いろいろ置き字を探し求めたが、さうも落ちつかない。それで「病みふして」を平凡に置いてしまつた。これなごも確にキズであらうと思ふが、他に適當の言葉があれば御指教を得たいと思ふ。それから舊作淋しやな一個の鍵を眼に觸れてを、『鍵にふれながら』を改作した。將來、句集を編む人は、この方を採用（若し採れたら）していただきたい。斯うして書いてゐる、私の筆は可なり不遜のやうだ。憤んでゐるんだが、なんこはなしに威張つてゐるやうだ、併し、まだ威張つてもよい。（それがうぬほれだ）一字や二字の争ひより、もつ内容に觸れて争ひたい。すくなくも大阪の川柳界は、内容に乏しい。素材は可なり變化があるが、これも、これ

も殆ど内容化してゐない。川柳が本質的に現れてゐない。誤解してはいけない。本質的（ほんしつてき）云つても、私共の畑に接近することを意味するのではない。傳統なれば、傳統らしく内容を整へなくてはならない。殊に、傳統の強味は何ものにも敗けない句の姿で、そして「心」を具備せねばならない。その點で、番傘の人々は日車君の作品なご、もう少し心眼を開いて見る必要があらう。私は、日車君の作品なご傳統主義の錚々たるものだと思ふ。新しい傳統とはいふも傳統を生かす人に與へる讚美である。日車君は、すくなくも傳統を生かしてゐる。其他の人々は、私のせまい川柳眼にもよるが、大阪には見當らない。或は京都にも、神戸にも――云ひつゞけて差支がないやうに思ふ。（不平があれば申し込まれた）大抵の人々は、傳統の意義を正しく解してゐない。だから「操微だと呼ばれ、因襲だと呼ばれるのだ。この際、番傘の人々も、縁天君の『本來空』以上になくなくてはならない。水府君の『水道』の句も、いつかり擱めたらよいが、まだ一皮の上を見たゞけだから可けない。『朝こいふ氣で』なごの境地を一度解放されねば生命的にならない。生命的とは、あゝいふ比喩が説明さか若くば形容に過ぎないのを打ち切つて、内容を整へることだ。自然に生きた、リズムが流るものである。

亦、不遜な書き方をした。も一つ最後に、川柳雜誌は、眞實をモットーとし、内容としてゐるらしい。眞實は大いに結構だ。嘘の句の多い大阪の川柳界として――。ところが、眞實を事實

そのまゝの表現が多くなか。事實に即する事は、體驗禮讃でもあるが、時に三面記事になり易い。川柳の素材は、社會を對象とするのであるから、それも止むを得ないであらうが。事實（眞實）そのものは必ずしも川柳ではない。事實はわれわれの素材としてあるのだから、それを一句の内容に盛り入れる時

に、相當の考へが必要だと思ふ。芭蕉を引き合ひに出す、又かき地方の生半可に笑はれはするが、彼の「虚實」の教へなど、たしかに噛みしめてみる必要があらう。「虚」は必然的に事實に添ふて存在しなければならぬ。これで久しぶりの憎まれ口を打ち切らう。

お 願

たいと思ひますから――

其他青明に關して、思想、感情などを知

故人、藤村青明に關して左の諸項

一、句稿（新聞、雜誌、又は續込、自署短冊、句會短冊其の他）

るに足る他人の青明觀又は青明批評を書いて送つていただければ尙は一層幸甚

に該當するもの御所藏の諸氏は、

しばらく小生に拜借の便宜を與へ

一、文章（主として感想、批評、論文などがよろしく、發表未發表は問はず）

です。

られたし。小生目下川柳革命史を

木村 半 文 錢

執筆中青明の歩める路を概観し

一、書簡（ハガキ、手紙などに、感想、批評などのあるのがよろしい。）

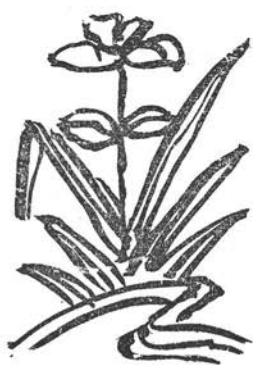
（大阪市西成區三日路町六六五）

麻生路郎選

同同同同露同同同同同同同同屏同同同同同
斗 三占

同高同同同大同 同同神同同同大同同同丸同同同同神同
知 阪 戶 阪 龜 戶

同濁同同同山雨同 同同一同同同鮎同同同柚同同同同志同
水 樓 狂 美 闕坊 郎



古句雜考

竹馬居主人

▲つみ髪の前厄らしい美しさ(三月號)
前厄まへゑき云ふ言葉ことばの疑問ぎもんであつたが、古川柳家こがわやうかは頗る自由りゆうじゆうに用ひて居た事が覗はれる、従つて下五げごの關係かんけい上十八説じゅうはちせつが句を生かす事なる。

孝靈にうまれて今に後厄
これは富士山ふじさんの句で二十山にじゅうさんの謂はれたから前厄まへゑき十八なる。

かきつばたさつたら後はうしろ厄
即ち「かきつばた二十六字に骨を折り」
で句意はわかる

うしろ厄うしろゑきなき正成惜しがられ
日本外史にっぽんがいのしを見ても七生報國しちせいほうこくのあとで禍刺わざさ而死し正成年四十三しやうせいのねんしじゅうさんある後厄あとのゑきから察して

●前厄が區々に用ひられて居た事がわかる
▲正月はもみ手で路次の鍵をかり(三月號)
自分の家賃かぢん無關係むかんけいに對して柳雨翁りゅううからお説せつが出たのである

後ト月をやらねば路次もたたかれず
店賃がすんだか路次のたたきやう

なきは明かに家賃問題である
下駄さけて通る大屋の枕元

いちごきに出るなき路次をそつごあけ
之れは家賃かぢんは必ずしも關しなくてわかる。

▲一人者のまぬかはりに二朱がつき(初篇)
通釋とうしやくには下戸で一人者だから乾事かんじが氣を利かせて酒の代りに二朱銀を膳につけて呉れたさなつて居るが、暮の餅を

二朱搗くのである。参考句
一人者ひとりものごめんごうな二升にしょうさぎ

▲らうそくの灯ですい付て足袋をぬぎ(初篇)
葬式そうしき關係の句である

葬式に足袋を捨てぬは得手勝手
葬式には草履や足袋は脱ぎ捨てて歸る習慣である。

▲二三台戦ひ樂りつける(天明)

柳雨翁の二著に載つて居る。長井兵助ながいへいすけとして解してある「三方へ片足上げて賣付ける」で兵助の名は子供の時から耳にしてゐる、二三台戦は一寸チャンバラの真似をやつたもので、松井源左衛門は寧ろ有名である。賤のをた巻に曰く

又其頃松井屋源左衛門云ふものは、齒磨賣はなすりうりなり魚鐘の金物打たる黒ぬりの箱を重ねたる萬荷を兩担にして、小者にもたせ赤飯見附下を廣小路に出て、鬻を取彼高荷を兩方へかまへ居合刀(尤も刃引)にしてよくみがきたるなり」三尺許りなるを第一として、夫より段々寸劣りの刀

を品々掛て居合を抜くなり、手練目をおごろかしたるこなりけり、小者は相太刀をうつ、後は足駄をはきてぬき、又は三方の上に登りてぬきたり、彼三尺許りの刀を自由に取廻して、様々の形をぬきたり、今は見えず、猶相續して渡世するかしらず、此松井屋も同様に世の人のよく知りたる、こま廻しの立水は、今に淺草に居て、若君様始めて淺草邊へ被爲成候時は一番に御覽に入るなり、冥加なる渡世なり。

▲山の芋うなぎに化ける法事をし(初編) 百年忌(照光忌)の句である。

山の芋化して鰻をくひにくる 百年前泣いた日に魚類なり 泣く者はすつべり死んで百年忌

山の芋鰻に化ける百年忌 腥い鍋もあつまる百年忌

かたみわけさしみにつくる百年忌

『天神記』山の芋が鰻になる喧嘩のさへ人聲になる結ぶ縁こそ不思議なれ

▲矢野先生の隨想記に「昔成る田舎者が

山芋の鰻になりかゝり居るを發見し金儲けをなさんさて江戸に賣りに出でたるに幸に買人ありしも其値段折れ合はぬ故尙ほ高賣せんさて、終日持ち歩きたるに日暮に至り高き買手ありしかば、之を渡さむとて籠を開き見しにはや既に全く一疋の鰻となり居たり、買手不承知にて鰻を山芋の半成品なればこそ高く買はむと云ふに眞の鰻にては入用なしと破談となり、賣手大に失望せしと云ふ山芋の鰻のみかは世の中は半成品なればこそ珍重せらるゝもの多し、苟も半成なればこそ珍重せらるれ、十六七歳の少女も半成なればこそ寵愛せらるれ、世は様々のものなりと或人の語りき

▲一軒の口上ですむ配り餅(初篇)

通釋に『五月の柏餅盆の牡丹餅年の暮の餅』となつてゐる使が配る餅を一般に云ふ様に受取れるが、そうではなく東都歳事記にも『都で下旬親戚に餅を贈り歳暮を賀す、是を配り餅といふ』とあるから

年の暮の餅である。

又今のやうにささいな配り餅は全く類句である、『一軒の口上』に就ては一説あり、昔時は店子の糞便は大家の所得であつたから暮には餅をついて多少配つたもの、それは店子中の一軒へ届けて置けば分配して呉れるので、一軒の口上で長屋中がすむわけなる(此説に自分は必ずしも賛同するものではない) 店中の尻で大屋は餅をつき あだしい地主がゞみにうつるなり

そんな事を頭に置いて

大家から蓋ももちやけぬ餅を呉れ 夜つひこへ地主の餅でねつかれず

を見るに又面白い、近世風俗志に『家主戸籍等には主家三書則家守也、私には大屋も云ふ家主株は陽に金を以て譲る

雖然さう地主の意に應ぜず、或は奸曲及地代店賃等を多く償する時は地主より追放することあり、株金は略二十兩三十兩より一二百兩に至る地主よりの給金と餘得に應じて賣買に差あり、大略百

兩の株の年給廿兩餘得十兩蓋代大概凡三四十兩を得る、蓋如此の株金昔は賤しく年々漸く貴し、云因江戸は尿は専ら溝渥に辨之、尿は剛に蓄り、尿俗に「こゝろ」云云やしの略也、尿こゝろ代云尿代は家主の有し得意の農夫に賣之稀に尿を蓄ふ者あり皆代家主に收む、京師は尿は借屋人の有し野菜を代る、大阪は尿代は家主江戸に云地主の有し尿は借屋人の有し得意に與へて冬月綿蕪菜を以て易之、尿價大略の尿一年金二三分也賤地に近き所貴價也、ある。上方の小便朝のおつけの實きたない國は小便を汁へ入れ小便が野菜に化ける京の町

『京阪は路傍諸所尿桶を置いて往來人の尿を棄ず大阪は此桶渡邊云ふ〇〇村より出之こそ官許也尿を〇〇の有さず、江戸は路傍に尿所桶にあるのみ』

江戸では無用京都ではたゞを出し不二額田子へまたがる京の嫁(狂)此處小便有用京の町

京都に人皇五十代和武天皇の御代に長岡から移され一條より九條迄傳教大師九萬部の法華經を地に埋められたこゝある——壁に地へ和漢儒佛の書をうづめ——法華經は土中上には碁盤の目——經をふむ土地の名にいい数珠屋町——なごあつて地に經があるで小便さぶにせず

ミ聊か古川柳家がお世辭を言つて居る、自分は名古屋で産れた、有美氏の名古屋美人論にもある如く女の立小便は可なり見せつけられた、關西へくる程多い傾向がある。京都在住中便所内の紙屑籠には驚いた、蜀山人に云はせるミ、京の家々團の前に小便桶ありて、女もそれへ小便する故に富豪の女房も小便悉く立つてするなり、但良賤とも紙を用るずるミ紙籠なるものは享和以後のものだが京婦人の立小便は歴史が古い

女房で立小便は中二階

中二階は女形の樂屋、昔の女形は全く女の心掛けであつたが名優ならざるものに

は時にこんなのもあつたのである。序にお尋ねするが京都の雨は斜にふらず眞直にふるミ傳説を教へられて、つい忘れてしまつた

傘で顔のかくれぬ京の町
碁盤の上へ眞直に雨は降り
京都でも不沙汰の門は横に降り

▲配り餅から女人ミてへだてなし(天明) 詠曲竹生島の文句取りで『川柳江戸歌舞伎』に「四十九日の餅を配つたが最後もうそろ／＼隔てなく異性に接近するこの意かと思はれる」ミ、あれぞ、やはり前述の配り餅で四十九日説は否ミ考へる

配り餅草鞋をはくは一里の餘
おそなへの取つ替へこする忙しさ

衣配りの如きミ俳諧歳時記に年の始の料に親しき人々に衣を贈る事ミなつてゐる。

屠蘇袋これ針妙の衣配り
三浦から玉屋を呪ふ衣配り
衣配り又袖端らす親式部

川 柳 涼 み 船

夏 の 大 川 に て

塚 崎 松 郎

夏の 大川に涼み船を浮べて作句するこ
こは、昨年来引續き行はれて、我社の年
中行事の一つとなつた。今年も萬よし君
の世話方で、八月十四日夕より、涼しい
作句三昧の一夜を水の上に過ごした。午
後六時には、例の通り、アサヒビールの
繪提灯ミ、萬よし君の手工になる大小の
句行燈を吊した納涼船は、市廳舎北岸に
出席者を待ち構へた。ヤアノの聲がせ
んぐり殖へて来る。やがて午後八時、廿
餘名を乗せた船は岸を放れて大江橋の上
流を上つて行く。當夜は珍らしい涼風が
たちて、その爽快いはん方なし。難波橋
を過ぎるに、公園の涼み人がぞろ／＼こ
ほの暗い地上に涼を入れてゐて、剣先を
中心に、澤山なボートが、自威運動のや
うに、淡い三ヶ月の光りが映へた小波に
揺れてゐる。夜の川面のこうした残暑の
詩趣は流石水の都を思はせる。あたかも
電氣局主催の納涼會中にて、公園に種々
な催し物等があつて、露臺のマーチは我

々の一行を歓迎してゐるやにも思はれた
剣先の北べりに船を着けて、遅参の二三
氏を迎へた。席題「廣告塔」をまこめる
ために各自句案にふけた刹那、突然、
眞近に當つて一大爆音が轟いた。一同胸
を驚かす事暫し、氣を付けて見ると、剣
先の三つばなの而も揚花火の導火線近く
船を着けた事が知れて、愉快がるものや
避難を主張するものなごり／＼の中に
次の花火を合圖に句を締切る事にした。
飛んだ花火の餘興、ミは誰かの洒落の秀
逸。馬行、万よし君の披露に互選が終つ
て、寄贈のビールに満を引き乍ら船は天
滿橋上流に上る。白鶴さ美願水よりの寄
贈品が配られる。冷たいビールの酔が廻
るにつれて、各自の談論風發が交はされ
る。落語家に云はせれば「いやその船中
の賑やかなこと……チャヤチャンヤン
／＼」と囃しが入るまじろ。苦の方では
馬行、万よし君等を中心に、甘つたるい
人々が打かたまつて「戀愛論」が今正に

「甜」云ふ處をお邪魔して兼題「夜」の選句の發表をする。船はもう西に向けられて、涼風の中を流れに任せてある。松郎の發議によつて、船中スピーチをやる事にした。起各つて隨氣火焔を揚げる。出席者全部殊に當夜初めて句會に出席された數氏なごも、起つてその感想や意見を述べられた事なごは、柳界の珍として特筆すべく、船中のスピーチは大成功に終り、當夜を意義あらしめた。その中の秀逸さすべきは、飯山氏の「川柳に詠まれたるルバシカ」彩秋氏の「三粒の仁丹」路郎主幹の「名譽職と詩人」等に満場拍手を送る。かくて船は浪速橋畔に着けられて、本社萬歲を三唱し午後十一時過迄無事散會した。

路郎、夢路、南枝、松治、靜雲、六花坊、山月、枝呂、久郎、彩秋、閑路、一路、眠聲、鮎美、冷笑、飯山、松雨、馬行、史朗、三笑、ひろし、庵歩、助万よし、二柳子、松郎(出席名簿より)

夜 (兼題)

松郎 選

これだけに稼いだ夜を寒う寝る 露斗

物音を見にやる提灯のごもらず ひろし
青春の夜のなつかしき知り初め 万よし
夜の露路やわらかひ物に蹴つき 六花坊
嘘で固めた夜の出來事 鮎美
もう夫婦もの云はぬ夜が續く也 路郎
前後策促がすやうに灯がごもり 南枝
棧敷裏もうすつかり暮れてゐる 同
やがて夜になれば彼女の事に更け 眠聲
夜の誘惑白粧くさし 同
叱られる覺悟にいつそ夜ごなり 夢路
ひざり身にして夏の夜が天下なり 同
大阪の夜を知つてゐる無一文 馬行
父一人出遅れたまゝ夜ごなり 同
なんほ夜でもご女房の着更へ出 飯山
つづつまの合はぬ話に夜が更け 同
よい聲が來てからずっと夜番に出 同
(軸)うつむで眼鏡が落ち長い夜 松郎

廣告塔

互選

廣告塔暮から人に認められ 久郎
廣告塔行過ぎてからもふり返り 六花坊
屋根の色 廣告塔の色になり 三笑
廣告塔先づ大阪の明い事 眠聲
終列車で降りて眼につく廣告塔 ひろし

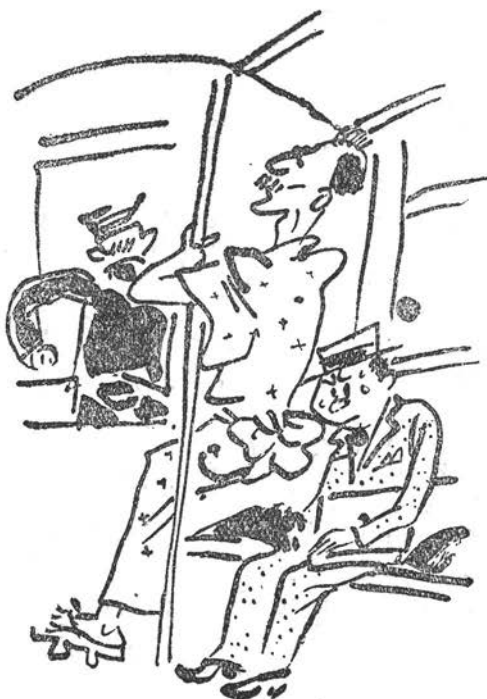
青い波赤い波廣告塔が映り 鳶歩
大波に廣告塔の字はくたけ 鮎美
廣告塔母は仁丹丈け覺に 松雨
廣告塔だけが動いて終列車 夢路
廣告塔雨の上つた屋根を見る 飯山
廣告塔驛前の夜は更けてゐる 同
廣告塔見てる様子で人を待ち 山月
乳母車廣告塔を飽いて行き 同
廣告の灯がはつきり酔が醒め 閑路
その話廣告塔へ近うなり 同
蜘蛛の巢のやうな廣告塔の裏 南枝
廣告塔二人の影が伸びて行く 同
家出して廣告塔にそゞろ寒む 松郎
廣告塔はつきり夏を思はせる 同
廣告塔の下で頁を繰つてみる 靜雲
廣告塔に押つぶされさうな家 同
微醉を馬鹿にしてゐる廣告塔 馬行
廣告塔の下を浴衣の人通り 同
ハ一モニカ廣告塔の影に消に 史朗
よび出して廣告塔をまぶしがり 同
煙草屋は廣告塔の下に生き 路郎
廣告塔一雨降つた中に立ち 同
廣告塔で二つに切れた天の川 同

漫涼しい顔

吉田きよし

電車内

可成の努力に依つて風通しのよい運轉臺近くに腰を下しやれ嬉しやと思つたら突然風



が止まつた。首を上げて見るに無禮な「シリ」が我物顔に涼しい顔

新戎橋より

万よし生

鐵血宰相ビスマルクが、普佛戦争の凱旋後、ライン川の月明の夜を泳いで、静かな水面の一點の俗塵を許さない月夜の美觀に心ゆくばかり浸つてから書いた日記に「近來の快事この遊ぎに如くものなし」云ある。

文豪トルストイの名一世に高まつて、もう老境にも近い頃の秋近いある日、翁は庭で一正のこかげが陽を浴びてゐるのを見付けた。翁はこかげに近寄つて「こかげよ、お前は幸福なのか」こ。こかげ答へず依然として陽なたほつこをしてゐる。翁再び「お前は幸福だね……間……併しおれは幸福でないぞ」こいふて長嘆息をした。

ソクラテスの聖名一世に高いのを聞いた國王が翼を付けて聖人を訪ふて「お前は一世の聖人ださうだね望み事があれば何でも叶へてやらう」丁度ソクラテスも陽を浴びて何か考へてゐる處だつたので「王様有がたう。だが、王様

百貨店休憩室

「オイ今日の大株の寄付はさうだ」
「恐ろしい高値に驚いたよ。俺はも少しで『ナンキン』を破る所だった?。」



折角美しい休憩室で無沙汰な姿を仕てふんぞり返り、かんじんの御客様が見ても麥茶のお變りを取つて涼しい顔。

がそこに御立ちになる私の日光浴が出来ません、私の望みは王様がすぐ其處を退いて下さるこです」と答へました。

この三つの話は人生の目的、幸福、詩の極致といふやうなものを切々私に教へてくれるものです。

川柳涼船に用ひるガスリン燈が近所の探してもないので、日本橋裏の五階の跡へ買に行つた。この五階跡の露店は百軒近くの店に和洋服、臺所道具、大工道具、矢立、刀の鐔、下駄片方、足袋半足……といふ風に殆んど無いものはないのが嬉しくて小半日素見たが時代の變遷の縮圖を見る様でした。

『仕事のない時は町の看板でも見て歩け』と教へた勝海舟に見せたらこの位喜ぶだらうと想像して微笑みました。

□頭で良い計畫があつても言はねば分らぬ、いくら言ふても手を動かさねばものにならぬ。足を運ばねば用は達せぬ

太閤秀吉は『急ぐときは草履片方下駄片方で行け』といふたが川柳も手も足も創作するこが本當ではないでせうか。

柳川 青明 忌

八月二日午後七時より
神戸 於中一俱樂部

八月二日の夕から神戸の中一俱樂部で青明忌を営みました。故人はもろく神戸の川柳家でありました、のち大阪に轉じられましたが、再轉されて神戸柳界の人となり、大正四年八月二日須磨の海岸で亡くなりました。それがため本社が從來修して來た青明忌を昨年からは神戸で開くことにいたしました。句の披露に先だつて、故人の知己として本誌の路郎主幹、神戸の紋太、本誌同人の美の作の三氏が「青明の思ひ出」を話されました。尙當夜は大變な暑さであつたので萬よし君が氷柱を立て、呉れ、神戸の光郎君から氷水の寄贈があつて作句の能率をはかつてくれました。なほ九時半ごろに故人の母堂が愛姪を伴はれて出席されました。(二柳子記)

路郎、城雨郎、紋太、素生、廣路、睡花、明烏、夢遊、録月、ひろし、柳芳、南耕、ひでな、山美、嶺月、一狂、万登、岳靜、梅雅、志郎、久郎、清公子、美の作、莢豆、松郎、万よし、藤村きん、二柳子(出席名簿より)

記者(兼題) 路郎選

記者團を逃れて町の驛へつき 梅雅
記者と言ふ生活らしい日が暮れ 万登
官邸は記者に青葉の風がゆれ 美の作
婦人記者ふこつまされた氣にも 同

商況もきく廣告ももらふ記者 ひろし

電話から電話で記者がさがされ 二柳子

愛の巢へよけいな用で記者は来る 露斗

執事から記者叮嚀に斷られ 素生

風呂(兼題) 紋太選

朝風呂のたき白う歯みがき粉 南耕
もうしまいらし湯ぶねの二三人 露斗
歸省して兎に角風呂を焚ぐれ 素生

妊娠を風呂場で目出度がられた、たまの朝風呂醉が残つて居大風の風呂場は聲が高過ぎる風呂立て晩を限つたやうに降りこの夏の輕さを湯屋で秤つて見風呂へ入つて間も考へ事が續き桶置いた音朝風呂によくひびきまだぬるい風呂へ母親ふたを貰ひ風呂聲がけられて立上り番臺にあづけて置け氣にかゝり湯加減がいゝ女房せきたてる失禮な姿師匠風呂で會ひ男風呂子供へ何かけしをかけ風呂屋へ戻つてもひまがいり母一人取残されたあゝで風呂夕飯の賑やかなのを風呂でき子が一人食べてゐる風呂で知り(人)あつい風呂水のとも脊伸(地)温くも又温くも安い風呂(天)履歴書が役立ち畫の風呂來盆 踊 互 選
齒が抜けるやうに更けてく盆踊 莢豆
盆休み若さの限り踊るなり 明烏
盆踊一人はぐれて月を浴び 柳芳
盆踊からのなやみに秋が来る 岳靜

粒々集

近什

安川久流美

涙落つ匙の穴あり冷奴

靴穿いて嬉曳の夜の月見草

夕立が来はせまいかミ盆踊 睡花
盆踊西瓜のほこり見へぬなり 二柳子
七月に入るミ盆踊の噂なり 清公子
もう眠くなつて太鼓の下へ来る 鎌月
盆踊列を離れて手鼻かみ 久郎
盆踊真似て見る氣で輪にはいり 志郎
歸省して僕は駄目だよ盆踊 山美
盆踊思出しては踊り出し ひでを
提灯のもう消えかゝる盆踊 素生
里歸りして友達ミ盆踊 同
盆踊ラブシーン丈大寫し 嶺月
盆踊泣く若者が一人居り 同

今年から踊る娘へよい噂夢遊
螢取るやうな手つきの盆踊 同
盆踊隣村までおよぎ出し 南耕
盆踊上手はあまりくたぶれず 同
盆踊はなれて闇に白く立ち 岳靜
川向ふからも聞こゆる盆踊 同
一人減り二人減りまだ踊つて 廣路
盆踊村一番の聲を出し 同
盆踊疲れた足に露があり 一狂
二百十日を知るや知らずや盆踊 同
座敷半踊の太鼓遠くきゝ ひろし
踊疲れた頃家が氣にかゝり 同

別莊の灯が遠い盆踊 美の作
盆踊つなけば堅い掌 同
踊る氣か一人やぐらから下りる 万登
盆踊忌中の娘誘はれる 同
盆踊二人はおない年でした 城雨郎
踊の輪レールを越えてちご崩れ 同
盆踊今晚のいゝお月さん 松郎
叱られて来たミは見へぬ盆踊 同
酒くさい息へ遠のく盆踊 同
影法師又影法師盆踊 紋太
ミこのおつさんかと思はせ盆踊 同
まだ汽車は通らぬ國の盆踊 同

一本のマッチに愛の二人寄る

ボツミ息ついた所がわが命

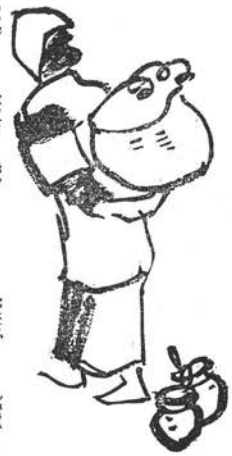
悠然ミ麥酒のゲツプ子をよせず

握るべきものならざりし玉子

この川の上流にすむ個人主義

文藝交友思出物語 (續)

駒井美の作



明治から大正の始にかけては女性にも色彩の變つた種々の人達が顯れた。それは平塚雷鳥、松井須磨子、田村俊子等の入達であつて今より一層華やかに確に賑やかでも有つた。東京の市村座には六代目の狂言座が開かれたりした。李さんの南蠻寺、吉井勇の句樂の死、時雨女史のフラソコ等が上演され、句樂の死には舞臺に本當の酒が持出されて菊五郎や三津五郎が少々本當に好い心持になつて仕舞つた噂も有つた。幕合の立話仲間、田村俊子が妾一度白井權八がして見たい云つたが當時の俊子が云ひさうな正直事で皆は一樣に輕い微笑を浮べた。私は楠山君の即興の「南蠻寺仕出し斗りで幕をしめ」云ふ輕い其時の批評川柳が冗談乍ら今も耳に残つてゐる。亡くなつた島村抱月さんにも藝術座が神戸へ来るに大抵一度は夕飯を共にした。長身瘦癯神經質に小さく光る眼の持主の島村さんはお須磨さんの事を松井が松井がさ細い澄んだ聲で呼ばれた。其抱月さんの反對に須磨子さんはさこ迄も強いぐんぐんさ力ある心持がはきはき凡てに表現されてゐた。衆樂館の當時中村吉藏さんの一幕物のハツトピンが上演された時、幕切れに女が帽子針で男を一突きに突殺す處がある。私は其日丁度舞臺裏で扮装した須磨子氏一寸立つたまゝ話をしてゐたがお須磨さんは自分一座と自然對抗にな

る大黒座の入りを大分氣にしてゐたらしく、あちらはさうですミ訊ねた。私はまア七八分の入りでせうと答へた途端一方舞臺の幕詞のきつかけに耳を澄してゐた。お須磨さんは突然身をひるがへす、聞いてたよ聞いてたよと怒號し乍ら舞臺に飛んで出て行つて仕舞つた。勿論夫を承知してゐる私は何んとも思はないが此場合前後の話の連絡上これから舞臺の方の幕詞のお芝居かわからない。傍にゐた私の妹は膽を潰して仰天したが跡で此話は皆に腹を拘へさせた。澤田正二郎君が舞臺へ出たのに臺を忘れて地頭で舞臺へ飛出した滑稽話もこんな時に聞いた事で中井哲、田中介二、武田正憲等や今松竹映畫の跡見庸太郎も藝術座に居た人である。お須磨さんも死ぬ前にはカルメンの様な役がいやになつたり、最後に自殺するさきの扱帯に色か青か、ミ二色を選びで死んださ云ふ噂を聞いた時などは私は矢張りお須磨さんも女だなさ一人考へた。そして故人の最後の舞臺のカルメンは其翌年の春再び改めて今度は先般大津教徒に身を投じて新聞雜誌を賑はした中山歌子に主役とし、抑川村花菱君で作曲家の中山晋平さんが煙よ煙よの歌をピアノで伴奏して歌子に稽古等をさせてゐた。歌子は、も正確か帝

劇歌劇部の出身で流石の自由な事を晋平さんはほめてゐた。今蒲田のスターミ輝いてる川田よし子も其時は娘のミカエラかをつこめてゐた。或日川村君が何か駄目はないか云ふから川田の歩き方が悪様に思ふ云つたら、尤もた川村君が其部屋に懇々行つて注意したが薬が少々つよすぎて御常人のよし子さんが涙をこぼして舞臺に出ない駄々をこねて怒つた。昔を追想する夢の様で今もお可笑くてならない氣がする。キネマ連中の御存知の岡田嘉子等も其役者の一人で焼けない前の有樂座は多く人の知らない事だが他の劇場と違つて舞臺が正面から傾斜になつてゐる嘉子先生達は煙草の歌を唱つて歩くのが恐ろしくダンサーの今村静子と御互に手を握つて舞臺に出て行つた。従つて他の道具に關しても一寸小面倒の様で此小屋に慣れ切つてゐる舞臺裝置で有名な岡本歸一畫伯も其後畑中夢坡君の新劇協會あたりの時も訪ねて行くこゝへ窓をつけるこゝいゝが、歸一さんは机の上で首をかし氣てゐる時もある。歸一畫伯は私の友達中の好男子の方だが誰も感歎する巧な舞臺裝置や其繪の美しい獨特な色彩も顔に似合わない兵隊さんの様な頑固の手から生れ出て來た。心安い私が冷かすこゝらゝ笑つてよく人を睨んだ。此頃は小供の畫のすつかり伯父さんになつて岡本歸一は小供の生血を吸ふ者也云つたら傍から奥さん迄がふき出した事が有る。遊びに行く野口雨晴さんが來合せてお得意の童謡を唄つたり今の築地小劇場の連中を話したりした。以前の岡本さんの家は草木が多く茂みの下に井戸が有つて夏行く私は星を見上げて度々水を浴びたが田舎に歸つた様な心持がする時もある。そして其井戸水の凛烈さを今でも忘れな

い位である。守田勘彌は其奥さんに私の惡戯坊主の學生時代に隨分世話をした其因縁で根岸の家にはよく遊びに行つた。鰐鰯ミ犬が好きで夜はよく更けても家業の習慣で勘彌氏は平氣だつた。或時は怪談に身が入つて電車の無くなるなぞは勿論お構ひなく話上手な面白さに釣ひこまれたが流石踊りの名人の稱が有るだけ話のはづみに幽霊の一寸型が出て夫だけで隣間に人をぞつこさせた。當初有樂座の旗上げに東京で暇な私は樂屋で養子の阪東玉三郎君とよくトランプを小供の様にした。玉三郎君は其時小さい癖に中々するくく露探の例にトラ探云ふニツクネエを頂戴したが遂先願意々阪東秀佳かの囑名をする手紙をくれた。帝劇の初瀬浪子さんも其時近松の油地獄のお吉をつこめた油屋の場から裏の廊下で逢ふこそらそら紅の手を冗談に人の顔につけに來たりした。憲さん貴郎に能登さん云ふ名をあげますよとお浪さんが云つた變な名ですね云ふ大菩薩峠云ふ小説を讀んだ事が有るかき聞く。未だ讀まないに答へる。駒井能登守云ふ人が有るんです云ふ。惡漢ですか聞く。大丈夫、好い人なんです云ふお浪さんが中里介山の代理に此場合引受けてくれた。此芝居の後一二子浪子さん大森の花月園に遊びに行つた事が有る皆が私が飲める口だき考へ違ひをして私はすつかり酔はされて仕舞ひ罪のない動物園で見た狸の寢言を云つて浪子さんの厄介を受けてはなはだお氣の毒に思つた事も有る。帝劇の一期生の佐藤濱子さんの家は家中國藝家で私が専門の立場で審査會に出席する。菊なさを上出來に出品された。其關係でよく知つてゐた鈴木福子氏の他八重子さんと呼ぶ妹君もゐられて正月年始に

行つて羽根を突きませう云ふ平常靜かに暮してゐる人が羽根をついてこんな事は本當に珍らしい事です。話をしたりした東京の住ひの近所には洋書家の中澤引光氏や死んだ東儀鐵笛氏が居た。東儀さんには時々朝風呂で出逢つた。そして又私の伯母と東儀さんの伯母さんは堅法華の信心友達だつた。僕は日蓮を自分でやるが太鼓をドンドコといて本當の處隨分法華は煩るさいねと哄笑して東儀さんはまわりの人々を笑はせたりした。其他芝居へ行くときよく坂本の紅蓮洞にぶつかつた。紅蓮さんは誰にでもお前さ呼んだ。そして年に幾度か大枚高々五十銭か一圓位代る人々皆紅蓮さんに其日のお小遣ひをヤレつかつた。我々はそれを税金と稱へてゐた。圓顔の代表が森律子なら面長の代表は紅蓮さんで長大な軀に振つた帽子等被つて居た。紅蓮さんの逸話では紅蓮さんの知己の處の或る子供を紅蓮さんは本當に可愛がつた可愛がつて呉れるのはいゝが餘り抱いたり撫でたりするので奇人の紅蓮さんは其子供にたうさう鼠をうつして仕舞つた云ふ奇抜な話がある。然し不幸に其子供が亡くなつた時に紅蓮さんは通夜の人々が居眠りかける可愛相だから起きて居てやつて呉れ片つ端から起し廻つて翌日の葬式には炎天の下を紅蓮さん自身が棺の片棒をかついだ云ふ噂を聞いた事があるが之等は紅蓮さんの面目が隠如ししてゐる事である。此間死ぬ暫く前生方敏郎君の處に行つて己は變人奇人云はれるのが此頃イヤになつた云つた相だがそれから間もなく矢張り紅蓮洞君は死んで仕舞つた。

脚本家の池田大伍さんは有名な東京の天鼓羅天金の御次男で兄さんが金太郎大伍さんが銀次郎それでは妹さんはお鐵ちゃん

かいと聞いた洒落者がゐる。築地の家に遊びに行くとき天鼓羅をたべるかいと大伍さんはよく訊ねてくれた。あゝ御馳走になりたい云ふと銀座の店の方へ電話をかける。自轉車で飛んで來る出前持ち先生同じ店から奥へ持つて來るのに毎度有難うと臺所で怒鳴る。あいつもう始終口癖になつてゐるんだぜと大伍さんは笑つた。書齋を支那風に構へて壁に坪内博士の筆の聯がかけられたりしてゐる。訪ねて行くとき唐扇で善哉と招かれさうだなと私はひやかしたりした。震災後も桃色や黄紙の壁を張つた家を建てゝ日本の家も今にこうなるよと大伍さんは悠然と納まつてゐた。吉井勇さんはいつも大島ぞつきの伯爵殿でお酒も却々強い遊びにでも行き度い顔で直裁簡明で一度一所に行つた事もあるが奥方を迎へて以來長い事逢はない。長田秀雄さんの前の宅は私の處に餘り遠くなかつた。夫に鐵砲打ちのお仲間の一人で特に親しかつた。成年二人で栗橋に出獵した事がある。中仙道の栗橋は利根の河畔にあつて大江洋々一寸景色が大きく明るい感じのする處だ。

「來よこいはいば來べき一人を呼びかねて初雁きゝぬ栗橋の宿」云ふ蕨園の歌もある。花袋さんが推賞した稻村屋と云ふ宿屋が有つて對岸は舊街道に今以て張店に物々しい煙草盆を前に置いた街道氣分たつぷりな遊廓がある。水が植られた櫻並木の下を縦横に流れて、洗れた牛がのそり々方々の狭い廊の中を歩いてゐる等は中々面白い。或時繪描き仲間が稻荷屋の會に藝者を呼ぶと妓共は渡して眼前の利根の大江を渡つて來る。夜が更けて藝妓が歸して呉れ云ふので眠いのかと訊ねる。妾、朝學校に行くの云つたので大笑ひをした云ふ話がある。秀さん其栗橋へ獲物を山程の積りで二人出掛ける。勿論奥さんにも

遊びに來合せた能島武文さんにも、鴨や鵜を歸つたうん御馳走する意氣込み。處が第一の稻荷屋が商賣を止めて二人やつち知合の意味で泊めて貰つたが肝腎の鳥の方は一羽もされない。這々の體で歸つて來るに、關で如何がでしたと奥さんが云はれる鼻の折れた兩天狗が、何に憲さん稻荷屋の鵜は甘かつたネミ空手の御馳走に御近所のかしわを喰べたのは一ツ話になつてゐる。鐵砲云へば猿之助の弟の信さんから菊五郎と猿之助と二人獵に出掛けて猿之助が六代目の尻を打つた話を聞いた。幸ひズボンが彈より堅かつたので無事だつたが猿之助はこりこした云ふ珍談が有る。歌舞伎座の女關で其信さんが駒井さん一度連れて行つて下さい云ふ。いけないよ君の一門は直に尻を狙ふからさやる。是には流石の信さんも吹出した。其頃芝居歸りに牛込の神樂坂を歸るこよく秋田雨雀さんに出逢つた。畑中蓼波君や雷鳥氏の愛人博さん達のチエホフの櫻の園を見た歸り金子洋文さんと土田合村さんと雨雀さん坂の中途で珈琲をのんで洋文さん二三年前したワニヤの伯父の面白かつた噂なごをししたりした。雨雀さんは文壇中でも中々演説の巧い人だが社會思想を帯びてからアノ鳩の様に丸い眼が鋭くなつた様に私は思われてならない。大震後無残な本所の燒跡を見て歩いたのも偶然秋田氏二人連れでお互に一生、忘れない事で有らう。忘れない事云へば故人會我廼家十郎生寫さの定評がある中澤弘光畫伯と會津磐梯山の裏に畫友二三子モデル女共々寫生旅行に一處に誘われた事が有る。畫をかくない私は釣から歸つて來る中澤氏が沼畔で裸のモデルをなぞは別に珍らしくもない。平常畫室で見慣れて居る裸のモデルなどは別に珍らしくもない。

が行つて見るに水心のない中澤が眞青になつて騒いでゐる。見ると同行の一人子モデル女が底の知れない水中にもがいてゐるに、驚愕仰天して私は水に飛込んだが岸は高く肥つた女の素裸位、掃かまへ處に困る者はない。始めモデルが腦貧血で岩から水に轉け込みあゝの一人が些かの水心に助けに飛込むが危ぶなく共々無理心中の處で幸ひ二人共無事だつたは好いが夫から其モデル女史が無理心中の對手方に熱烈なる思を寄せると云ふ始末、閉口したのは對手方で近々妻君もきまつて居るので此片思ひの君を持て餘し圓極なる拒絶を私を通じて頼む次第、私こそ仕舞ひ迄さんだ三枚目の役でこで當時中澤氏から勇敢なる行為を譽められたが山中の出來事で別に警察からは人命救助の御褒美も出ないし、誠に割の悪い事だらけだつた。こんな事をかき出す中々話の種はつきない位。そうかと思ふこ或時は途中帽子を脱ぐ丸藥罐の紳士を中村吉藏さん間違へて挨拶をして面喰らつたり田中純さんと田村松魚と後姿を見違へて捕かまへて閉口したり、岡本歸一さんが今度は反對に私をモデルにして惡戯に何か雜誌に私の似顔を描いた事もある。最近では花菱君がキングに私の昔の失策話を書いたが震災後、處が不明になつたり私もこちらに引移つてから子供が生れたり等して遂々不精にさへも御無沙汰勝に親爺めいたが、こんな事を考へ出すと今更笑ひ出さずにはゐられなくなる。先頃もいつも氣のわかい中澤氏からの手紙に京都の方に戀人が出來たなと相變らず氣樂な事を云つて來たりするにそれからそれへ東京の吾氣な人々の顔や扱てはなくなつた面白かつた人々の記憶やらがヒルムのように私の前に廻轉して今も獨りぼゝまれる。(元)

募

集

句

頓服

安川久流美選

明日来い博士頓服丈けを呉れ
 頓服の代りに服む玉子酒
 頓服をくしやみで散らすむい車
 頓服のまたのこされた小抽出し
 頓服のお蔭さうやら朝さなり
 頓服が瘦せた身體の汗しほり
 お袋の持病頓服だけで済み
 働ねられて母頓服を持てあまし
 頓服の一つに廊下長すぎる
 頓服でけろり子供飛び廻り
 美しい手で頓服を強いられる
 頓服も今度ばかりは駄目かしら
 頓服はよく利く様な赤包み
 頓服の後に母親乳を出し
 二服目の頓服少しやけで飲み
 頓服のちさきつ過ぎた羽根蒲團
 頓服の後へ注射の時間が来
 代診が来る頓服父のませ
 母親の眼に頓服は毒なやう
 頓服の二服残つた儘で死に
 頓服も添へて藥局口を添へ
 頓服でおさめて母もちさ眠り

皓半 山月 志郎 一文 眠聲 突支 紫光 三次 柳秀 郊村 無心 白鷺 拔天 同夢子 同史朗 同のほる 同憲翠 同

頓服の後は靜かな雨の音
 氣の強い話し頓服グツグツ飲み
 壁の方向いて頓服寝てしまひ
 頓服がまはつたものか高いびき
 長いこ病み頓服の名を覺け
 子にのます頓服母も口を開け

秀逸 同 呂 路

治まつた所へ頓服届けられ
 頓服は昨日一昨日から寒け
 頓服でやつ寝ましたお茶を汲
 死んだ兒の頓服が出る大掃除
 頓服をのんで明るい顔になり

柳秀 史朗 万よし 山雨樓 同 同 同

七月から私は、課題吟の選を一般に斷つた
 ので有ますが、この「頓服」の稿は六月十五日
 二柳子君の方から、福井の方へ送つて頂いた
 もので、手紙の廻送されなかつた爲め選の遅
 れたものでありますから、つまり六月十六日
 にこの稿を受け取つて居れば、選も同月中旬に
 選句してあるわけですが、山雨樓君の句がいつ
 ち垢わけして居たやうです、どうしても課題
 吟には類句があるから佳句があつても同題
 のため反古にするのは致し方ありません(七
 月二十三日)

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所
 (五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)
 好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川
 柳以外の趣味(一一)配偶者の有無(一二)嫌
 ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(99) 高木角戀坊

(一)高木英吉(二)角戀坊(三)嶺南(四)東
 京巢鴨三の三五(五)明治九年七月三日生
 (七)一例「松原の茶屋はいづるが景にな
 り」「赤さんほ空を流るる龍田川」「黒木
 賢大事に跡をふりかへり」「八瀬小原さ
 れいに牛を頓る事」「抜けた櫛四五遍お
 ざる琴の上」「(八)クシャ／＼のお婆さん
 だけが嫌ひ、其外は皆好き、但し好きこ
 云ふのは嫌はない云ふ消極的の物で、
 積極的の好きこそ違ひます(九)廿何年來
 一日して句を作らぬ日にてはないが、
 自分で之ならぶと思ふの一句もない、
 皆書き棄て書き流し短冊色紙は恥の上塗
 り我が多くの作品こそ後世一句でも拾つ
 て貰へたらそれこそ望外の僥倖(一〇)江
 戸ツ兒の持つ趣味は皆持つてゐるがそれ
 は云ひ立て、偏した物ではない、新内を
 聴いても琵琶を聴いても浪花節を聴いて
 も、義太夫をきいても喜んで耳を澄すこ

水

水を打つ役目が廻る夏になり
大關へ今一ト息の水を入れ
水の色二人が死ぬる深さなり
投げた葉に水の速を見せられ
捨水に蟻氣を替へた様に折れ
水打つて浴衣が揃ふ涼み臺
水の色ふさ泳ぎたい氣にもなり
水ばかりかけて魚屋賣残り
水面に寫つた影が淋し過ぎ
初奉公水道の栓がねじ足らず
氣まぐれは犬にも懸る水を打ち
噴水塔干旱のせいを高く吹き
酔ざめの水に電氣の明るすぎ
ソーダ水二人話を進めてる
水替へし瓶に金魚の美しさ
惚れ合ふた二人を呑んで元の水
飲めば飲むほど汗になる水
無縁塚あまつた水をさつと浴び
夏だけは小言を云はぬ水仕事
生活に水撒くだけの用があり

紫光 鮎美 眠聲 利剱坊 柳天 汀柳 案山子 無心 光路 緋紗子 大夢子 彩秋 千鳥 芳香子 残紅 龍造 秀

柳川洲馬選

まだ生きてゐるかさ螢へ水を吹き
今替けた水に金魚は落つかず
人形のやうな水撒き運轉手
立話撒水車に位置をかへ
煮切らぬ返事に水を差して去に
母見兼ね水鍬砲をさり上げる
水藥すかして呑んですかして見
蓮の花昨日のまゝの水に咲き
撒水車チト嫌はれてすれ違ひ
粉藥を口にふくんで水をよび
山水を襲めた座敷で茶をよばれ
眞打ちは水呑む手附きから違ひ
バネ仕掛けの舟で基平を溺し
多過ぎる水が農家の愚痴になり
飛び込んで水を押さへて蛙淨き

其象 天花 山雨樓 三次 濁水 不滅 翠 同 山月 同 万よし 同 助六 同 住作 山雨樓 志郎 眠聲

榮轉

榮轉は近所へすつと禮に行き 乃ン柳子選
榮轉は同郷の蔓さ云ふ噂 突支坊
病んでゐる母を榮轉喜ばせ のほろ

橋本二柳子 共選

榮轉にみじめな過去を書き立て
榮轉の今度暫く居据る氣
萬歳に榮轉少し頭下け
榮轉を妻は左程に喜ばず
千鳥 彩秋 柚蘭坊 大夢子

云ふゴミ溜め主義、だから社中に繪を描く者七八人、我樂他宗、素人宗等の山號寺號を持つ者も四五人、要するに萬屋で一つも魂を打込んだ趣味さ云ふものはない(一)配遇者有り、家内の事は知る人ぞ知る、婦人參政同盟の幹部で主婦の會の會長、政談演説で全國各地から招聘されやうさ云ふ勢ひ、政談で打込んで來れば皮肉な川柳で「受ける」云ふ風、呵々(二)大家ぶる人、無暗に喰つてかゝる人、理智の露骨な人、感情の露骨な人金持ぶる人、酒さ眞桑瓜、見へ透いたおべつかを云ふ人(三)私の十六の年、團珍、頻方新誌、花らし、等に投書し初めたのです、其頃鶯亭金井さんは選者だつたのだから蒙いさ思ふ、でも鶯亭さんは少し年上なんだ(新川柳勃興の頃には私は露垣夢文君と親しく籬の方に深く出入してゐて新川柳なんぞは甘い物ださ笑つてゐた)

(100) 西本 三笑

(一)西本智安(二)三笑(三)久夢助・虹の家(四)大阪市天王寺區東平野町二丁目二十三番地山田重次郎方(五)明治三十三年八月廿六日生(六)嫁入道具、漆器、家具、卸店員(七)主張を持たぬ私は各派の主義に迷はされ好きな句も時々變遷します。「狂人になれず眞面目に働けず」久流美氏

榮轉に留任運動起るなり
志郎
榮轉の辭令へ母は手を清め
無心
榮轉の前に盃並ぶ事
山月
榮轉をさして聲にするつもり
案山子
榮轉の子供に軽い悩みあり
普天
榮轉の朝則かに齒を磨き
光路
榮轉へ家主も軽い世辭を云ひ
柳也
なに榮轉でもありませんと嬉し顔
利劍坊
榮轉に水が良からが惡からが
眠聲
榮轉の夜から晩酌ひこつ殖に
吞月
榮轉の噂があつて小半年
紫光
榮轉の寫眞に獨り者ごあり
拔天
榮轉の當座榮轉らしくなし
汀柳
榮轉の思ひ出深い町を立ち
三柳
ネクタイを替へて榮轉禮に来る
次花
柿の木を榮轉惜しく見上げた
雲花
榮轉は子の轉校も考へる
靜雲
謹直ご思ふた男榮轉し
柳秀
榮轉の途中を怒で寫される
同翠
榮轉に妻の一周忌が近し
憲翠
榮轉へ活版刷りのはがき出来
同美
榮轉へ社長握手を求むなり
同平
榮轉の今日はステッキ振つて
三平
榮轉に母は佛壇磨いて居
同象
郊外に住み馴れた頃榮轉し
其象
榮轉にごちら向いても知らぬと

榮轉と言はれ打消しながら笑み
濁水
榮轉といつて友が來記者が来る
同
榮轉の乾杯不平なのも上げ
万よし
榮轉は頼母子をみなかけて行き
同
榮轉に社長の知らぬ金を借り
同
榮轉の母には季候氣づかはれ
助六
榮轉の此所にも小作爭議あり
同
榮轉の事から支那の話が出
同
夏足袋を履いて榮轉嬉しさう
山雨樓
榮轉ご知らず魚屋持つて来る
同
甚敵に負越しのまゝ榮轉し
同
◇ 柳路選
榮轉の貯金を出しに行く用事
山雨樓
榮轉の思出深い町をたち
三次
榮轉のそれから趣味を變へる也
其象
榮轉の噂があつて小半年
紫光
榮轉に國の母親呼ぶ手紙
鮎美
榮轉を妻は左程に喜ばず
大夢子
榮轉の今度は遠い所なり
彩秋
榮轉も矢張淋しい思ひして
乃氣坊
榮轉ご聞き留守宅へ記者が来る
千鳥
榮轉の辭令喜こぶ妻は死に
濁水
榮轉の日を女教師の涙ぐみ
天花
榮轉の荷物は先に届けられ
三平

の句を時々思ひ出します(八)細面線の柔
かい淋し味のある中背女人肌(九)是も時
々變遷しますから發表して後に自信の句
に非ずと一枚舌を使ふのが嫌やですから
やめます(實は無いのですが)(一〇)生花
常盤津・乗馬、盆栽、柔道(一一)非公認
のあたりはあり?(一二)魚釣り、割前を
出さぬ人、拳、映畫(一三)大正九年二月
北都川柳社小集會

(101) 岡田 乃ン氣坊

(一)岡田貞司(二)乃ン氣坊(郊村を今回
改號)(三)四柳坊(四)神戸市兵庫島上町
六番屋敷(五)明治四十年六月十三日生
貧弱な會社員(七)咳二つ聞ぬ中を天
皇陵(八)花坊(九)鈴實はきこの子供が抱き起
し(一〇)長襦袢障子びつしやり締めるな
り(一一)紋太、まだ(一二)澤山あります(一三)妖
艶ごあり化粧をせぬ女(一四)目下盛んに製
造中(一五)登山、笛、阪妻の映畫、まだ
外にもあり(一六)なし(一七)自慢、噓言
高ぶる人(一八)大正十四年の春神戸柳壇
へ投稿しかけたのが始まり。

(102) 水 谷 鮎 美

(一)水谷信雄(二)鮎美(三)太郎冠者(四)
大阪市此花區龜甲町二丁目七九番地(五)

[illegible]

前號正誤

このごろの疲れさんでりやは、迷惑の手を砂持ちの曳かれ行く
路郎 悟郎 眠聲 文久 多聞 双柳
飴湯を飲んで 幽霊の話 怪談へ誰か水汲む首をさせ
迷惑なものも積んでる小舟なり 金に恵まれて醜男の一生

わたしは、わたしの路を行き、死顔
死顔へ物言ふたてて聞こやせぬ
静馬 行雲 博久 かほろ
ソダ水隅の二人は、静かなり
ソダ水ゆふべ、違ふ色が来る
飯山 番外

入聲は母こへ琵琶を聴かして居

▲寫眞をのぞむ

私は川柳家の謄寫を蒐めてゐますが、眞面目なでも、風變りなでも亦ん坊の輩のでも、結構ですからお恵み下さいませんか何れ何かの機會で發表したいとも思つてゐます。なるべく寫した場所その時の年齢や、同時に寫つてゐられる方々の説明を添へてゐるたきたいものです。(本社にて麻生路郎)

明治三十三年二月五日に生れしこか(六八)
驛掌(七)松郎さんの「貧しけれども朝風
呂に馴れ」馬行さんの「添ふて十年變ら
ぬものは斯なり」路郎さんの「豚の子は
海のひろさに引つ返し」(八)只今では過
去の夢想を打破せり、純な乙女なれば佳
し、決して大望は抱かぬ、妻と呼びてか
らは女らしさが欲しい(九)活字になるこ
自信がなくなります(一〇)時に微醉、歌
舞伎、キネマ、唄、赤飯、清元(一一)ま
だなし「好きなタイプ」の女の項参照お世
話下さい(一二)泥酔者、輕薄、女の洋装
自殺者を見る氣分、蠅(一三)本年三月、
冷笑、眠聲、案山子のクラスへ轉動、案
山子頻りに川柳の妙を説く、路郎さんの
「ふさころ手」及び「恥かしい嫁据風呂
の湯がこほれ」古句「灯の揺るが風の姿
なり」日車、の句にピンきて以来「川
柳雜詠」に産聲をあけました私。

戸籍調べ募集

▲川柳家戸籍調べは、益々完全なものになつて行きます。舊つて投稿を祈ります字數二百五十字内外本社事務所又は直接林田馬行宛の事

各地柳壇松郎選

第二回納涼川柳大會

矢田右大臣評

仁川川柳團主催 朝鮮毎日新聞社後援の第二回納涼川柳大會は八月一日正午より 月尾島相生の大廣間に開選された。

朝來よりの大雨は沛然として 車軸を流す如く、餘りに繁き雨足の爲め多數の參會を危まれてゐた事は全く危憂に終り、大雨を衝いて集まる、熱心な作家京藏仁る會して 參拾四名其盛會は察するに餘りあつた。

席題を締切る頃より大雨漸く止み 東北の松島に似た大小の島と、動こうともせぬ、白帆等招呼の内に眺望を欲しいまゝにする、三時席題を締切り折柄女中の知らせに各自思ひ／＼存分に潮湯に浸る。

かくて五時萬雷の如き拍手を浴びて 關門吟「大」互選より柳葉子披露を開始す。

各選者の披露毎に拍手鳴りも止まず 六時全く披露を終り、如何にも月尾島らしい晚餐を喫て七時小雨の中を無事故會す。(右大臣)

宿題「浴」 吾村選

(人)齊戒沐浴焼刃を入れる湯を調べ 寶月

(地)混浴の湯氣に女さ云ふ匂ひ小 猫
(天)日が暮れて馬方馬さ浴びに来る 二葉里

逸風選

(人)尻つぼを蜻蛉折々浴びに下り 流坊
(地)日が暮れて馬方馬さ浴びに来る 二葉里

(天)洗ひ水浴びて蚯蚓は道を變へ 五形坊

紅短舟選

(人)おつちち様に燕は浴びて飛び 柳葉子
(地)初産に夫婦の浴衣くづされる 春秋樓

(天)坑道を出てしみ／＼と陽を浴び 雨の介

鯨左衛門選

(人)釣竿に浴衣何度も話しかけ 洋々
(地)釜の湯をある丈け足し母は浴び 大眼

(天)死に顔を譽へ近所は湯を浴び 鯨左衛門

巷頭子選

(人)バラソルの斜は工夫の聲を浴び 實六
(地)日が暮れて馬方馬さ浴びに来る 二葉里

(天)僧浴衣 四五人連で道を聞き 古近

右大臣選

(人)稻光りの長さを湯浴び見届ける 柳葉子
(地)坑道を出てしみ／＼と陽を浴び 雨の介

(天)夕焼を浴びて一艘戻つて来 久念坊

關門吟「大」 互選

四點以上

三二

釣上げた子供 大きな聲で呼び 赤鳥
大雪のあま川丈けが生きて 居り 春秋樓
*トかたむいて 大きな波が過ぎ 右大臣
電燈の塵を見付ける 大男 大明人
大將になる子素直にもう泣かず 秋州
大急ぎ連れた待つ間に 汗を拭きだるま
大雨に投げ込んで行く 新聞紙 十郎兵衛
遠大の希望も捨て、舞ひ戻り 逸風
大きな釣れるさそこら寄つて来る 柳葉子
大將になれる子つまらなく遊び 二葉里
ある丈けの大聲で 話す 舟と舟流 坊
密航は大平洋を狭く過ぎ 寶月
朝晴の空を大きく 驚は舞ひ 牛頭子
朝顔の大きな雨手で 輪を示し 正樂子
見くらべて子供大きな方を取り 木堂

席題「四斗樽」 正樂子選

(人)四斗樽をゆすれば 蔵の父けの音 壽柳子
(地)漬け終へ四斗樽石へ一人呼び 由良の助

(天)二三人して四斗樽を据へに来る 柳葉子
(軸)重石が女にあまる 四斗樽 正樂子

席題「出来心」 二葉里選

(人)藝口を拾つて 悩む心なり 喜笑
(地)出来心家に病んでる母あり 五形坊

(天)寶石にふさ出来心手が延びる 靜の男

席題「五」 寶月選

(人)四捨五入損にならない方を取り 正樂子
(地)四五本になつた大根元で 賣り 赤鳥

(天)十五夜の月へ童謡九くなり由良の助
(軸)五右衛門の墓にも同じ陽が當り寶月

席題「洋装の女」

右大臣選

(人)洋装の女英語が話せそう二葉里
(地)若い妻同士洋装する話し二葉里
(天)放たれた様に洋装家を出る紫里
(軸)マシン買つてから洋装と思立ち右大臣

▲三人寄つて

東京柳路報

千代二、駒人の兩君と、拙宅で簡單な小宴
小集を催しました。今日は柳樽寺へ参詣する
積りが、暑いので晝寝をして終ひ、今日の日
曜はふいになり、午前二時迄語り合ひ、大阪
の噂で一寸メートルるあげました。皆さんに
よろしくお傳へを願います。(柳路)

いつも親しい會合のお便りありがたう。かつ
て大阪で奮つておられた兄等が、さうして小
宴小集などを催されることは大變懐し味の
深いものゝ察します。その大阪の噂さやらの
聞かしてほしい。こちらでは此暑いのにも屈
せず、同人一同元氣です。同人の有志で一度
上京したいと思つてゐます。お三人の健康と
幸福を祈つて居ます。(編輯室にて松郎生)

女給

一通り女給の意見署長聞き駒人
夕立を女給見詰める巻煙草同

浴衣二枚洗うも朝の女給なり同
コック部屋女給が入つて騒がしい同
言ひ得ない處リエターかしこまり千代二
敷島を吹かす女給に智恵がつき同
バラソルの日焼に女給目を落し同
晝行く女給ナフキン折つて居り柳路
女給出世して何んに成る積り同
今更に元は女給ですとも云へず同
海水着を着て居る寫眞女給見せ同
迷信、拒絕、密航

友達が来て迷信にしてしまひ駒人
丙午一生を女教員さきめ同
迷信と非迷信とでまさらす同
今はたゞ拒絕あるのみ男にて千代二
拒絕とは見へぬ言葉の町亭さ同
拒絕する氣のうなづいてゐる許り同
密航へだんく沖が暴けて来る柳路
密航の事は云はすに成功談同
密航へ一層淋しい雨さなり同

▲万よし川柳

(萬廿八回)集句百七十五句

「若盛り」

淺井五葉先生選

若盛り喫煙室に落付かず山雨樓
若盛り振られる筈でない氣なり光雄
若盛り辯論の袖がちぎれてる三平
二の腕を自慢してゐる若盛り聞路

佳作(選者短冊進呈)

これざりの財布をはたく若盛り一路

次回題「古本」五句

九月二十日〆切

林田馬行選

秀逸へは選者短冊進呈、道頓堀戎橋万よし宛

▲梅田阪神小集

案山子報

口辯ですませぬ事も四十過ぎ眠聲
すまぬくさ今日も拂はす同
口辯の又かいなあさ嘘にされ同
口辯が耳に残つて酔が醒め案山子
息を吐きに云ふたヘイ同
ありだけの息でやうく燃ゆつかせ鳴子
長命のなんのさ濡汗臭し同
荷車の夫婦一緒に汗をかき鮎美
その汗がみんなお金になつて来る冷笑

▲万よし偶會(一)

天王寺公園所見

放浪者團ひのいらぬ庭なもち中島
借りてゐる強味はつきり見せてやりK
差しづ差されつ川柳に共鳴し放馬
南洋は満洲はさて酔ふて差し同
發表のしたい處女作持ち歩き同
何でもが何でもあつて數がより卒郎
強がりと言つて其の後淋しかり同
飲んでもか飲まんでもかアいくじな同

▲万よし偶會(二)

看板

看板の塗替毎に家がもめ袖の字
看板を目當に小僧辻を折れ三笑

失職の當座看板見て歩き万よし
 かみ結の看板のある路次に仕み同
 看板をさるる二階の行李が見に飯
 看板も塗り替へたに客が来す同
 誤字のまゝその看板も古うなり同
 看板と同じ文句のチラシが来放
 親爺の變屈看板に書いてなし同
 看板の下に大きな貸家札同
 輕樂は看板程にやりもせず一
 看板屋梯子を降りてこれよく同
 看板へ初日のせまる忙しさ同

乾 孟

乾孟に舞妓間拔けた型で立ち三
 乾孟に仲居は折を詰めてゐる同
 乾孟がすんで牧師が口をきく一
 乾孟にどこかでピアノ音がする同
 乾孟は一さかたまりの女客放
 乾孟を女給はちつき見てる丈け同
 乾孟は乾孟不平は不平なり万よし
 乾孟の寫眞女將を中にして同
 乾孟の頃を決めてる宜い幹事同
 乾孟に羽織の組の白い事飯
 さゞこほりなく乾孟に立上り同
 乾孟にちき窮屈なまゝで立ち同

▲暑中見舞の句

万よし報

夏疲せのまへ薄着でよく目立ち助六
 淡路からしかけた雨に爛がつき城隅郎
 人並にもの申上ぐる暑さなり石戸
 海水着次第に濱の砂がぬれ京之助
 夏が来るたんび近來稀な暑氣梅雅

夕なぎに團扇の風も荒くなり紅笑子
 新婚の當座かしやも見て歩き芦穂
 彼女から墓一つだけの置土産中島
 酒の色しみく夜を思はせる太郎丸
 日曜の雨家中の御茶さなり透明花
 盆踊り本年はやる唄もまだ鞍馬
 水打つて今日暑かつた勝が出る金一郎
 氷屋を爪先で出る午後三時二天
 未納税の見舞を貰ふ暑いこそ萩原
 知らぬ人が挨拶をして魚籠覗く研郎
 白靴の運び明るい百合の南にて正義
 夕立の後に明るい百合の花千鳥
 災天の辻で神輿が練つてゐる素生
 掌中の玉へナイフを添へて出し久良岐
 裸にもなれず女の暑さなり南耕
 此頃は水の湧華さいふ暑さ南天樺
 大阪は空の煙りに猶暑ししづ子
 炎天の物凄いい程静かすぎ番外
 めいだ下駄揃はれたる暑さなり老
 午後三時う音に半分よみがへるひで一
 晩飯の前を少うし涼む人隨帳
 行水のシヤンを見付ける川蒸汽三太夫
 風のない愚痴涼室一人ふへ祐侍
 子をつれて涼しい道をよつて行き靜夢
 タ立が止まずそのまゝ夜さなり駒人
 アフアルト雪の道程照り返へし不二綱

▲万よし偶會 (三)

ピンボンの袖へ卓子引つかり三笑
 ピンボンに腰から上が踊つて居同
 ピンボンの事から起る仲たがひ越村

ピンボンでダンスのやうに動く足同
 ピンボンの窓でこぼろ見付けられ万よし
 ピンボンの球車役のリンを打ち同

▲万よし偶會 (四)

看板もお家流にさ親旦那點美
 看板がちさ癪だつた買はず去に同
 看板の裏に小猫を産んで居る同
 ホートから陸の景色は動いて居同
 貸ホート待つ間彼女は水を見る同
 ホートの二人さほごでもなし同
 一生を添へるわけではなしホート眠聲
 ホート流して明日も休み同
 「ホートは洗みぬ」歌ふてホート同
 ホートの二人冷やかされてる冷笑
 ホートに乗るさ云つたが元で死に同
 青春のホートへ雨も波もよし万よし
 ホート屋も一雨欲しい照りつゞき同
 看板に家傳と書いて金があり同
 六朝の看板變屈で通し同

各地柳壇の投句歓迎

例會吟でも、小集吟でも對座吟でも、何ん
 でも結構です奮つて投句して下さい。當欄は
 各地作句者の爲に開放してゐます。

(句數無制限)

締切十五日着便、締切後到着分は次號廻し、
 本社事務所内小生宛のこと。(松郎生)

遠近太興里

▲宮尾しけを氏より（信貴山）

しぎ山暑ささ涼しさの風のカクテル
で變てこりんな山（しけを生）風がふ
いて裸の二人寒い位（水府）

▲駒井憲氏（立山）

立山の主さ云はれる熊狩の名人助七他
四人を伴ひ同勢十人愈々之より黒部の
深谷にいる處に候（これだけ七月）

▲本誌寄稿家安川久流美氏は金澤市宗叔
町四番丁九ノ六へ移轉されました

▲岡本一平氏は東京市青山高橋町三番地
へ轉居されました。

▲柳蔭社の辻方馬氏は和歌山縣田邊町幽
靈松下へ轉居されました。

▲西村山月氏は大阪市港區鶴町三丁目第
一區一九八へ移られました。

▲住夢遊氏は區劃整理のため居住地が神
戸市御崎本町三丁目二九一番地へ改稱
されたさうです。

▲道廣御泉氏 大柳坊を廢し御泉三號さ
れることになりました。

貴地滞在中の御歡待を謝し今後の御

風交を祈り上候

川柳雜誌社

麻生路郎

和歌山縣田邊町

柳蔭社同人諸兄

▲津田春篁氏は病臥中と聞いてゐます。
全快を祈ります。

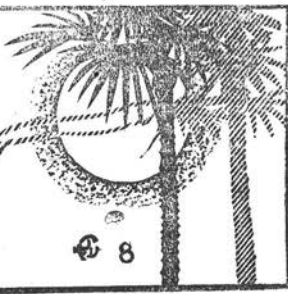
清涼飲料

ニボリン

ニボリン

ルービヒサア

8





川柳塔

塚崎 松郎

妻を愛して一編の詩がなりぬ
昔親しい友あり出世をしてる
切れし日を岐阜提灯に灯を入れる
生れ來て蜘蛛を恐れるこゝ久し
一杯の酒にもよはい夫にて
今に見ろ見ろさ瘦せてく許りなり
信心をする嫁持ちてより寂し
貧しさの朝の心地をめぐまれて
妻こして母親として今日在りぬ
子に噓を云ふたたりがやつてくる

父親の此頃秋の月のやう
ある時は仕立賃から養はれ
ワンワンにそらおしつこをかけてやれ
口へ出さねぎ捨られはせぬか知ら
饒持つか持たぬに子供そこにあるず
よく寢言云ふ亭主こは思はざり
石を敷く人夫こそはなつたりな
這ふ如く二階へ上る時もあり
騒がせた子供の熱はけろり下り
女鮮人けなけに籠を提けてるる
母の目におかしな髪が流行るけな

日給で子を養ふて居りまする
母さつれ立つていゝ月仰ぎけり
獸れ息子お前を育てたのにはなア
裁判長も得るさころあり

○ 岩崎 柳路

若さも若し帶揚げのその赤さ
物干で虹虹虹さ子が見つけ
つれづれに女の年を聞いて見る
ケイブルを降りて女はホットする
女房を呼べば腰湯をしてゐます
帶を質に入れても指環はめてゐる
道徳がさうのさうのさ巡査云ふ
椅子持つて社長は窓の際へ行き
下り神戸行の聲が懐しく
煽風機さこへ置こうかなさ女將
○ 松本 助六
笑ふてる中でうつむく損な性
一枚の浴衣の糊が落ちて来る
高下駄で見附けた棚のごみを拭き
なぜ母を欺ますか姉よ醒めてくれ
蚊遣りの煙ぶるにも貧しさがこもり

儲かりの續いてる内子は育ち

○ 喜田 飯山

謠でも習ひなさいさ縫うてゐる
脇息によれば座敷の廣いこさ
美しいまゝで花嫁今日も暮れ
恩人によつて肥わたなさ言はれて居
秋になつたねさ病人から手紙
氣分でも悪いか馬のつんさ立ち
私をせずに路次から路次へ越し
女房はラムネ一本でたんのうし
次の間へ出戻りのもう寢間を敷き
妾宅でシャツ一枚になつて飲み
格氣はすなさ無理をいふなり
灯取虫をこつんさ闇の中に捨て
つきあたるさこまでモダンガール行き
お格氣へ下女ちゃんまりさ手を重ね
ピンボンの球うちかへしうちかへし
女事務にハンカチ洗ふひまがあり
提灯をたゝみの上で點けて貸し
○ 森田 輝翠
差支へなけりやお泊り水いらす

される氣は髪を梳かずに逢ふてゐる
息詰まる様にもの言ふ椅子へかけ

○ 庄 万よし

孤兒院を今日は吐つて暑い事
或日ふも三者さなつて子を試し
塵のない部屋子の出来る本を読み
妾の子飼犬だけさ仲がよし
魚釣りに傘さしかける赤手柄
釣に來て一人は泳ぐばかりなり

大峰にて (一旬)

道普請哲人らしいのも交り

○ 酒井 駒人

木影にさ樂しんで居た木は切られ
焼跡のサーカス今日も雨さなり
傳票を晝寢の脇で婚調べ
縞柄がはつきり撮れて若く見
聞くだけは聞くさ友のあたたかさ

○ 黒木 莢豆

かわいい眼の兒へ洗濯をする
海來れば砂の心のうつまりぬ
こころ意氣さはこのやうにやせたこ

原始人の戀の勝利を巴旦杏よ
吐るころに空は果敢なし
豆の葉のふくれるひみつ丸い雲
雲見れば雲も涙のひまはなく

○ 林田 馬行

家内中養子に惚れて二年経ち
すぐに酔ひますさ酔ふのを待つてゐる
云ふなく生きてゐるから生きてゐる
はしなくも机の裏を見る日あり
敷金を入れて來るのも母の役
朝めしが食むぬくさ羨ませ
母性愛電車の中をはぐからず

○ 橋本 二柳子

高野山にて

こん夜でも大阪は暑いでしよか妻
欠伸したのがきの間へも聞わたる
あすの日も寢ころぶさきめ寺にゐる
涼しさの闇に聞わたる雨蛙
手洗の柄杓に泳ぐ蛙がゐる
墓石が並ぶに拜む人もなく
炎天の埃りも知らぬ別荘にゐる



編輯後記

▼七月の末から八月へかけて、いろんな事で忙しかつた。夫れだけ達者でくらすた譯で感謝してゐる▼あちこちから暑さのお見舞狀に接した。有難う。一々お返辭をさしあげたが二三出しおくれたのもあつた。不悪お許しを乞ふ。中には誰から來たのか不明なものもあつた。誰だか、富士山へ登りました。これから東京へ廻りますといふ得意なものもあつたが矢張り名が落ちてゐた。暑いから無理もないと思ふ▼前號は特別號で郵税が倍かゝつた。それほご内容の充實したものが出せた譯である、各地から多くの讀辭をうけた九月號も原稿が輻輳した。それが爲に内容が充實して氣持がよい。▼表紙は小出檜重齋伯を煩

はした。信濃橋洋畫研究所の夏期講習會の寫生旅行から引き續いて二科會への出品で忙しい所へおしかけてスケッチして貰つたのである。漫畫は吉田きよし、森田ひさしの兩畫伯に得意の筆を揮つて貰つたもの、大いに味つていたゞきたい▼七月二十五日の夜は天満宮の名高い夏祭で、社報部の囑をうけて吉岡島平畫伯、立木公愼社長、藤本卯之助君、三好革郎君と僕が社報船に乗つた。私は「川柳西瓜は赤し」といふ天神祭裏面觀に川柳を挿入した原稿を送つた。既に讀まれた方もあらうと思ふ▲同人太田朝陽は八月一日から濱寺の南海食堂の主任として濱寺に勤務してゐる▼八月二日午後、駒井栄の作と二人で神戸の椿元紋太氏を訪れ、それから同氏の奔走で美の作と二人で藤村青明の實姉、普よし子さんに逢つた。そして冷めたいビールを呑みながら亡き青明について話した。夜は中一俱樂部で青明を修した。多數の參會者があつた。随分暑い夜で氷柱を立て、句作した。紋太氏、美の作、僕といふ順に青明の思ひ出が語られた。當夜青明の實母藤村きん子さんが愛姪をつれて列席された。全く久しぶりだつた。年はめされたが相變らず元氣なお母さんだつたのは嬉れしかつた。墓碑に「藤村青明之墓」と彫らせるほど青明を理解してゐられたお母さんと思ふさ、我子にひ

さい多くの川柳家を近く見られた時には感慨無量であつたことであらうさお氣の毒に思ひながら阪神電車に揺られて歸つた▼二日、河村桃哉氏健康を氣づかひながら能勢寶塚を回遊されさうである▼八月三日の朝東部の井上劍花坊氏が今澤、市川二氏を同伴して來社された。共に大阪へ出て旅館大野屋へ入り、岸本水府氏に電話して同氏を迎へ共に歸つた話は雅俗混交であつた。夜道頓堀千日前方面の散策、劍花坊氏等は翌四日夜歸東された▼八月八日山本光雄氏、吉川啞人、竹田芦穂の三人連れて山口、廣島方面へ回遊された。芦穂は引き續いて大峯山へ登つた▼萬よしも大峯山から頼りがあるかと思ふさ、甲子園の野球だよりをよこす、こゝもさ熱狂兒の活躍振りは目ざましい者である▼十四日の夜は本社主催の納涼川柳會で夢のやうな一夜を過ごした(句報參照)▼駒人は千葉から大磯へ海水浴に出かけ、歸途東京で柳路三千代二君に逢ひ三人で句會をやつた▼二柳子は十六日から高野山へ參詣がたく々家族同伴の避暑▼私は十八日から二十一日まで南紀田邊堀楓林氏の柳隨社同人に招かれて川柳行脚を試みた。同所紀行文は次號に掲載することにす▼吉川啞人君再び退社▼本號は飯山、馬行、二柳子、松郎と私まで編輯した。(路郎生)

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第十一號課題

九月十日締切

(各題二十句以内)

割 前
浅井五葉選
林田馬行選
廣川番翁選
三條東洋鬼選

第三卷第十二號課題

十月十日締切

(各題二十句以内)

老 人
篠原春雨選
矢田右大臣選
牛 肉
井上刀三共選
金 持
西垣松雨選

每號募集

▼近作柳傳(三十句以内) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報) 塚崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓(共稅郵)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十五年八月廿五日印刷

大正十五年九月一日發行

第三卷第九號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
川柳雜誌社
振替大阪三五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂 金城堂
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田 後藤
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石堀

社主藤堂氏の
ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あそこであんなことを云はればモソト本が賣れたらうにさ後悔をするところなど仲々うれしいうちさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのだといふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおちさんを満足させて下さい。

〓路 郎 生〓

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

愛知醫大 豫科教授 石田元季先生校訂

西原柳雨先生著

川柳參尾志

一名 川柳戰國史

定價 一圓五十錢

送料 十二錢

愈々發賣

本書は川柳界の權威にして博覽の譽れ高き西原柳雨先生の近著になり曩に東京より刊行せられたる「川柳江戸歌舞伎」「川柳江戸名物」「川柳吉原志」等高評噴々として著者の文名一時に轟けるは世間の知悉する所なり。著者好んで戰國の史籍を閱し血湧き肉躍る處に到れば寸鐵殺人の靈筆を以て小品的に文を傳へ附するに古川柳を以てす。畫龍點睛の妙こゝに於て見るべく、彼此照應して錦上花を添ふるが如し。敢て一讀を薦む。

發行所

名古屋市中區南園町一丁目

圖書刊行會

發賣所

東京市日本橋通四丁目 春

陽堂

振替東京一六七一番
電話本局三九四六番

振替東京一六七一番

我國が完全なる禁酒國に到達する迄、幾分でも飲酒の害毒を除去せしむる目的を以つて、己むを得ず大酒大食したる私の過去の苦しき經驗からサーマス錠を創製しました。

うんと飲んで一日酔ひ、惡酔ひは絶對せず翌朝頭腦明晰、能率増進、胃腸健全、澱粉、蛋白、脂肪に對し消化力の強大なることチアスターゼの適量の八倍乃至十六倍

熊谷英夫

妙藥 醉ひ さま 妙藥

サーマス錠

前坊醫學博士實驗推賞

六三亭御主人實驗推賞

東西力士諸君實驗推賞

万よし御主人實驗推賞

(三十五) (錢十)

特約 ●大阪 高島屋、十合、白木屋

●三越、灘萬、堂ビルフアマシー

●マルホ藥局、成見屋藥局

●名古屋 松坂屋 ●京都 大丸

●其他全國著名藥店にあり

親切なる旅館、料理店、飲食店、待合、貸席には必ず備へ付てあります

卸代 ●丹平分店(大阪平野町)高橋分店

●(大阪博勞町)小林大藥房(大阪)

●京町堀)賣藥會社(大阪土佐堀)

●賣店 小林大藥房(名古屋廣小路通)

製劑元

大阪市東區仁右門町

熊谷糖尿腎臟病藥研究所

電話東三五一四番振替大阪七一〇二三番

❖ 探偵は……赤埴へ!!

❖ 證據 偽證據詐害行為隱匿財產特許侵害其他證據蒐集

❖ 信用 會社商店資產信用乳母會社商店員雇員調查

❖ 所在 家出人拐帶遁亡轉居先不明其他ノ所在搜查

❖ 素行 學生會社員雇人ノ素行夫ノ素行妻ノ行狀内偵

❖ 婚姻 家柄血統祖先宗教父母ノ性格家庭性格素行學業體質交友趣味嗜好技倆收入資產外必要事項調查

❖ 調査は……赤埴へ!!

(大阪東區北濱一七二(野村ルビ前濱側))

赤 埴 探 偵 社

電話本局二七三一番

清酒

よろこびにそへて白鶴届けこき
 榮轉の今日も白鶴呑み續け
 白鶴がいつものバーへ運ばせる



灘 津 堀

嘉納合名社會醸

水了軒のお辨當

に會集・・・に行旅

山をほの海をたゝへてお辨當



大阪梅
田驛前

水

了
軒

電話 北六四〇番
一八三四番

大正十三年三月三日第三回出版開始（毎月一日発行）
大正十五年八月二十五日印刷 大正十五年九月一日發行

第三卷 第九號（第三十二號）

定價金參拾錢